

Save The Tropical Forests

# ワールド

森の通信

41

1996.10.25



Hutan

C  
O  
N  
T  
E  
N  
T  
S

- ◇ 自治体キャンペーン 豊中編 …… 3
- ◇ 熱帯材使用削減を行っている自治体一覧表 …… 5
- ◇ ウータン・ニュース「狩られる北の森・ロシア」 …… 6
- ◇ 「なんで熊本県産同伐材合板を作ったの …… 7  
— 中九州建設見学 —
- ◇ 次期・投打ち族に参加して …… 9  
官永文
- ◇ 運敵・熱帯林を考える 猪俣栄一 …… 10
- ◇ 熊野からを読まれるにあたって …… 14
- ◇ 山の傳り「熊野から…」中村義明 …… 15
- ◇ つくり手からの家具のお話 …… 17

- ◇ ウータン森の通信  
アートより… 18
- ◇ ウータン活動報告  
…… 19



表紙の言葉

◆ 峠 隆一氏 [環境ライター]

● 花持つ少女

いったん打ち解けると、サラワタの子供は人の目をまっすぐに見て微笑む。決して美人ではないこの子も何とも愛らしい。まだ就学前なのに、朝は豚小屋の掃除、昼は農作業を自発的に手伝い、時には近所の赤ん坊を抱っこする。その姿に私は心安らぐものを感じるのだ。

■ 本誌は再生紙を使用しています。

【表紙】新草木染・ハーブ(64.5kg、古紙40%)

【中紙】バガス(55kg、非木材紙50%、古紙35%)

## ◆「環境に配慮した施設づくりについて」

建てるときから、使用期間中も、廃棄後も、「人にも環境にもやさしい」公共建築をと、豊中市で活動する3団体が一緒に豊中市に申し入れを行いました。

『ウータンとよなか』のメンバーと、ダイオキシン汚染に取り組む山崎さん、ソーラー・エネルギーの開発・普及に活躍する福本さんが出席、それぞれの取り組む分野から、豊中市生活環境部との意見交換を行いました。

## ■ 熱帯材について

① 具体的な熱帯材の削減目標を明らかにしてほしい。

② 建築物の下地材・内装材や家具でも、熱帯材の使用をへらしてほしい。

③ 耐震性・耐久性を考慮した、公共建築の使用期間を何年に設定しているか。

回答は、②については「可能なものは取り組んでいきたい」とのことでしたが、具体的に「間伐材の学校家具」などが検討されているわけではないようです。

①③については「96年施行の『豊中市環境基本条例』を具体化するための環境基本計画の中で考えたい。96年度を初年度として（熱帯材の削減も含めた）環境目標を定める」とのことでした。

### ① 型枠（コンクリートパネル）

Q 公共建築の設計の仕様書に「複合合板型枠の使用」を明記しているにもかかわらず熱帯材のみの型枠が70%を占めているのは（買い置き分を考慮しても）どうしてか。原因は分析しているか。92年の指針に「型枠の繰り返し使用」がうたわれているが、実際の程度転用回数が増加したか、把握しているか？調査は？

A 聞いていない（注：今回、建築部からは出席がありません）

環境に配慮した設計マニュアルを今後考えていく。

Q 複合合板はあくまで代替材のひとつの選択肢。針葉樹もロシアの材などは、持続可能な林業からのものでなく、また伐採によるメタンガス発生など深刻な問題も多い。堺市など大阪府の自治体では、他の代替材も検討しており、豊中市はその点においては一步遅れているので検討していただきたい。

③ 耐用年数は定めていない。環境基本計画のなかで考えたい。

## 2. エコ・エネルギー利用について

Q ＊川越市の省エネの事例のように、市としての節電を推進してほしい。

関西では例がないので、是非豊中市が先頭をきってください。

＊ローカルエネルギーの開発を。ソーラー発電には国の補助金がでます。

＊震災時の停電に対応できるようソーラー発電をおこなってほしい。

＊雨水利用への補助金をだすなどしてほしい。

### 3. シックハウス（室内汚染）について

Q 基本計画策定以前の問題として、塩素系の建築材料など有害物質を使わない事を仕様書にうたってほしい。（生産されていること自体問題だが）

ダイオキシン汚染は焼却が主原因。「使わない」「焼却しない」ことが肝心。

Q 環境基本計画が早くできることが待たれる。それまでに女性センターなど新規施設がどんどん出来てしまう。（設計の予算が決まるのは、施工より2年前になる）

建築や教育の方にもぜひきょうの内容を伝えてほしい。

A マニュアルができなければなにもしないというわけではない。

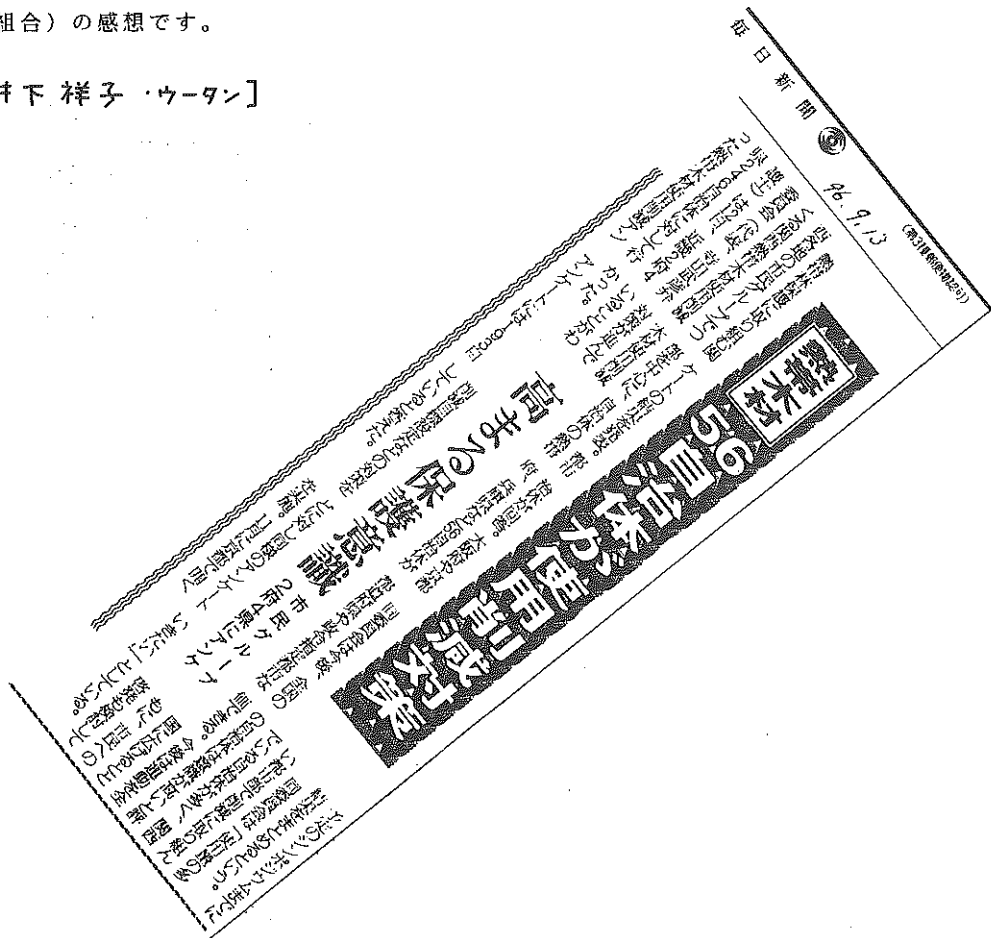
現状のなかでも雨水利用など出来ることは各課でやっている。たとえば、老健施設でもコ・ジェネと雨水利用、豊島球場では雨水利用を採用している。

市民の意識も「緑はいい」といいながら、「雑草がこまる」といった苦情がでる面がまだまだある。産業界はISO14001シリーズがこの秋から動きだしているので、少しずつ変わっていくだろう。

まだまだ多くのやりとりがありました。ページの関係で割愛します。

自治体とへのはたらきかけは、大勢でつめかけて攻めたてるのではなく、じっくり意見交換、提案をしたいと思います。が、今回の話しあいでは、大きな改善については『環境基本計画』待ち、の印象が強く、具体的な提案についてもあまり反応はありませんでした。「具体案ならいくらかでも出せるんだけど……」とは福本敬夫さん（とよなか村エネルギー協同組合）の感想です。

[ 井下 祥子 ・ウータン ]



# 熱帯材使用削減を行っている関西の自治体状況

関西の59自治体が熱帯材削減施策 1996年9月現在

自治体名	使用削減概要	自治体名	使用削減概要
大阪府	削減目標75%。複合合板、PC工法等。特記仕様書有。92年2月府下自治体へ削減指示。	兵庫県	県産材モデル工事に有。複合合板、鋼製型枠等で削減。
大阪市	削減目標2000年に70%。複合合板、ラス型枠等。仕様書有。	神戸市	複合合板、鋼製型枠等で削減。
堺市	95年まで削減率85%、新市民病院は非熱帯材で建設。	尼崎市	複合合板等使用で約50%削減。94年から熱帯材原則禁止方向。
豊中市	削減率約30%。特記仕様書有。	姫路市	PC工法で使用量削減。
吹田市	削減率約50%。特記仕様書有。	宝塚市	鋼製型枠で削減。基本計画有。
八尾市	新庁舎建築等で型枠約30%減。	伊丹市	複合合板使用。特記仕様書有。
藤井寺市	新庁舎をPC工法で約85%減。	川西市	削減率約13%。複合合板使用。
松原市	新庁舎建築の型枠を約17%減。	西宮市	94年より複合合板等使用。
高槻市	複合合板等、熱帯材約35%減。	芦屋市	94年より複合合板使用で削減。
箕面市	複合合板、PC工法等。	村岡町	鋼製型枠で使用削減。
枚方市	鋼製型枠等で減。仕様書検討。	一宮町	地元産材利用。
守口市	93年新着工施設は熱帯材90%削減。複合合板、PC工法等。	加美町	国産材利用で削減。
東大阪市	93年よりモデル工事。複合合板等で約70%削減。仕様書有。	奈良県	鋼製型枠、複合合板等で削減
茨木市	複合合板、鋼製型枠で削減。	奈良市	複合合板等。93年に抑制指導。
門真市	複合合板、鋼製型枠で15%減。	御杖村	国産材使用。
摂津市	93年より複合合板等で実施。	下北山村	国産材使用。
池田市	鋼製型枠、複合合板使用。	滋賀県	複合合板指定で削減。
大阪狭山市	鋼製型枠や塗装合板使用で減。	近江八幡市	代替合板使用。
和泉市	複合合板、鋼製型枠等使用。	京都府	92年1月削減施策表明。複合合板、PC工法採用等。地元産材使用モデル工事に有。
岸和田市	94年モデル工事で80%削減。	京都市	92年4月より削減。複合・塗装合板、PC工法等。一次目標40%達成。特記仕様書有。
貝塚市	鋼製型枠、複合合板使用で減。	福知山市	熱帯材削減策。(今回未回答)
富田林市	94年複合合板、鋼製型枠使用。	亀岡市	針葉樹合板で減。(今回未回答)
寝屋川市	95年より削減。新庁舎等、複合合板、PC工法等採用。	城陽市	熱帯材削減策。(今回未回答)
四条畷市	鋼製型枠使用で削減。	美山町	熱帯材削減策有。地元材利用。
河内長野市	モデル工事に有。鋼製型枠等。	宇治市	熱帯材削減策有。
泉佐野市	PC工法で削減。	長岡京市	鋼製型枠、塗装合板で削減。
阪南市	複合合板使用で50%削減。	弥栄町	鋼製型枠、塗装合板で削減。
羽曳野市	複合・針葉樹合板で削減。	久御山町	鋼製型枠で削減。
忠岡町	代替合板使用。	宇治田原町	国産材一部使用。
		京北町	国産材利用で削減。

\*和歌山県下の県、市は熱帯木材削減策なし

1996年(平成8年)8月29日

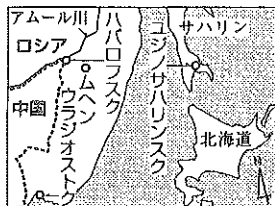
夏月  
**狙われる北の森**  
ロシア  
樺太地方

ハバロフスクからヘリコプターで東に向かう。広大な湿地帯を越えると、深い森が延々と続く。エゾマツ、ベニマツ、トドマツ、シラカバなど、針葉樹と広葉樹の混交林が緩やかな起伏の山を覆う。森には、絶滅の危機にあるシベリアトラをはじめ、イノシシ、クマ、シカ、オオヤマネコなど大型動物も多い。

突然、丸裸になった山の連なりが現れた。パイロットが「皆伐と火災の跡だ」と叫ぶ。パリカンで刈るように木をすべて切る皆伐が

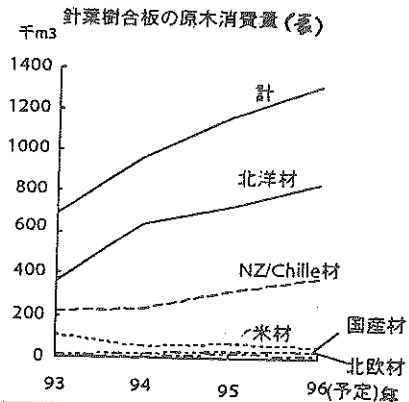
表でも判るように、針葉樹合板のうちで北洋材(ロシア材)の使用がさかかっている。近年は、総量の3分の1だが、今年は何と67%にも増えた。皆伐に近いロシアの森も危機と言えらる。今後調査も必要だ。(西岡)

**熱帯雨林から「皆伐」シフト**



**輸出の大半、日本向け**

行われた谷沿いから出火、広大な山を焼きつくしたという。皆伐の跡はいたるところで見られる。道沿いや山の



斜面に裸地が点在し、まるでゴルフ場だ。皆伐や火災の後にはシラカバが繁殖する。シラカバの価値は低い。すむ動物も少なく、ほぼ「死んだ森」だ。元の混交林に戻るとは百五十二年かかるか、二度と戻らない。平地なら福地になりやすい。百二十四平方キロを焼いた一九七六年の大火災の跡も、やはりシラカバ林だった。次は車で伐採現場へ向か

った。ハバロフスクの東約百五十キロにある伐採基地の町ムンから、森の中をさらに約百三十キロも走る。道沿い近い所は皆伐された跡に近く、森が蓄積する炭素質はアマゾン熱帯林の半分にもなる。「環境破壊」との批判を浴びる熱帯雨林の伐採に代わって、この北の森が、日本など木材輸入国の熱い視線を集めている。



木が無秩序に伐採された現場。このように樹木や枝が放置されていると山火事の際の「燃料」になるので大変危険だ。ロシア・ハバロフスク地方、ムヘン近郊で

「金がない」と払わないケースも多い。ロシアの国土の四割を占める樺太地方。その四五%が森林だ。その面積だけで日本の七倍以上。木材資源量は二百億立方メートル。「地球最後の未開拓地」の一つといわれ、森が蓄積する炭素質はアマゾン熱帯林の半分にもなる。「環境破壊」との批判を浴びる熱帯雨林の伐採に代わって、この北の森が、日本など木材輸入国の熱い視線を集めている。

ハバロフスク地方では、伐採された木材の半分が輸出され、その九割が日本向け。経済危機のため、ここ数年、伐採量は落ちているが、自由化で外国資本が参

入し、巨大開発が進みつつある。同地方で最大の伐採会社は、米国とロシアの会社の共同企業体だ。昨年からは伐採を始めた。米国は害虫の侵入を警戒して丸太の輸入を中止しており、日本への輸出を狙っている。樺太地方の経済浮揚の力を握るだけにロシア側の期待は強い。が、環境影響評価も事実上ない開発への懸念は大きい。ムヘン地区森林事務所のアレキサンドル・エルマコフ所長は「最も価値ある樹種はベニマツだが、近づける場所ですでに消失し、八九年に伐採禁止となった。今は値段の高いトネリコが狙われて減っている。植林せずして輸出を増やすのは無理だ。でないと、子孫がこの森の資源を残せなくなってしまう」と語る。乱開発と、地元にならずに現金しか落とさない丸太のままの輸出。熱帯雨林がたどった道に似ている。環境保護団体「地球の友・日本」のメンバーで樺太地方に三年間住んでいる米国人のジョシュ・ニューウエルさんは森林保全の関心の低さを嘆く。「樺太の1%の森しか保護されていない。もっと保護区が必要だ。外国には、地元で木材加工を進めるための支援を期待したい」

# ★なんで熊本県産間伐材合板を作ったの？

～市民が変われば、自治体、企業も変わる！～

西岡 良夫

## 《間伐材合板の製造は金じゃなか！》

22年ぶりに訪れた熊本。水俣へ向かう。

熊本駅で国産杉間伐材合板を作った中九州建設社長の後藤道雄さんと合流。

「いかがですか。しんどかなかですか」と後藤さん。熊本駅で下車せずに一路水俣へ。

今日訪れるのは、水俣湾の南にある国産杉の間伐材を合板に製造している新栄合板だ。

「間伐材合板を作るきっかけになったのは、熊本でのアースデーの参加と、その後サラワクの人たちと会ったことからなんです。その時は遠い話だと思ってたんですが、私らもコンパネを浪費してるので、何かやらねばということになったんです。元々熊本の地下水を守る運動をしまして、熊本の水を守るには阿蘇など山の保水力を高めたいと思ってたんです。

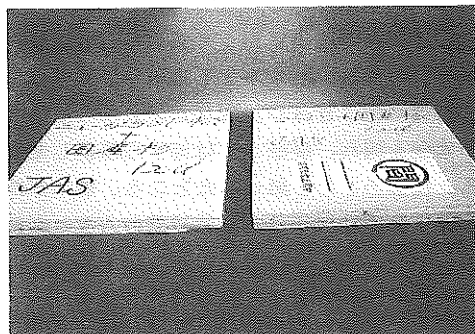
このまま日本の森が間伐もせず放置されれば、山が荒れる。それじゃ間伐材で合板を作り、それが熱帯林保全にもつながるのでやってみよう。金じゃなかです。」と後藤さん。

「間伐材利用は、品質、価格、販路という壁があったんですが、新栄合板へ持込み、たまたま皮が剥けた。ドラマですよ。後は売込みみたいで、勝手に走ったとですよ。」

水俣は静かだった。タクシーから猫も犬も見かけない。水銀汚染された百間港の辺りが埋められ、不知火海がとおい遠くに見える。

新栄合板で出迎えてくれたのは、生産部長の尾崎さん、小形さんら。後藤さんは私を紹介してから、新栄合板の人たちが工場を案内してくれることになった。

工場内は型枠用合板があちこちに積まれ、木屑が舞う。針葉樹のラジアタ・パインから出来たものや、パプア・ニューギニアからの物やと、いろいろだ。最近の熱帯材の輸入先



▲中九州建設の製品（国産杉を中心に使ったもの）

を聞くと、「主にパプア・ニューギニア、南アフリカ材が増えている」と小形さん。

新栄合板の尾崎課長は「初め国産杉を工場に持ってこられて、こんなものを合板に出来るかと思ったとですよ。皮がむけないだろうし、出来ても機械につまるだろう。1.97mの長さにしてほしいのに、長い木材を地元が運んでくる、それも葉をつけたままで。本来合板は水分を含んでいなければならない。生木状態でないとダメであるのに、林業家は乾燥させた木材を工場へ運んでくる。後藤さんに改善を言うたとですよ」と。

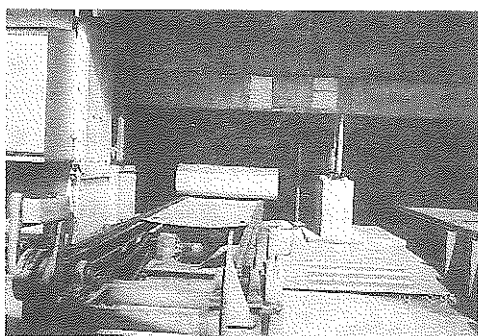
今年の4月に最新機を導入し、コンピューターで木材は合板にされていく。今日、間伐が運ばれ、合板にすると後藤さんに聞いていたが、月曜になるといのでちょっとがっかりだ。今日は、ニュージーランドからのラジアタ・パインが合板にされている。



工場の外に杉の間伐材が40本ちかく積み、その直径は約35~40cm。30~35年の木と、新栄合板の人から聴かされる。

普通の杉なら㎡あたり24000円で出され、市場へは52000円位で売買される。ところが杉間伐材は㎡18000円で、合板一枚(90x180cm板)は1350円~1450円と普通合板より高い。販売が勝負になる。

水俣を離れ、後藤さんは何やら連絡している。仕事のことと思ってたところ、熊本県森林連合会の野尻課長、県営繕課の人々と連絡をとって、今晩会わせると言う。突然の事だが、繋がり大切さを教えてもらった。



▲ 杉の間伐材を合板にする。

## 《仕様書のゴースインは人物と、つきあい》

「後藤さんに呼ばれたらいかねば」と馬刺し屋に野尻さんがやってきた。

「昭和30年代に一斉植林した杉は、熊本では成育が早く、除伐をほとんどせず10~15年に間伐をし、35年経てば伐期に入る。1年に1cm成長。本州、東北より早い成長だ。熊本県下の場合、伐倒より成育量のほうが大きい。このままでは山が荒れ減びる。つまり植林より間伐、伐採しなければならぬという理由もあったとです。」

商売しようとするとならダメ。山を守る方向で木を切り出す。山主に手入れするよう奨める。熊本材は並材だ。国産材が売れないので、山林所有者はみな危機感を持っていた。

そこで後藤さんが間伐材合板を作った。山主は大喜びですよ」と野尻課長が説明する。

すると、熊本県土木部役人で県建築士会青年部会の清水さんもやってきて、

「営繕課長の英断と後藤さんらの迫力です。それで県公共工事共通仕様書にも盛り込まれた」と清水さん。

後藤さんは「91年に市民団体の一員として熱帯材不使用請願をしたが、継続審議となり、その後県と建築業者の協力で『南洋材の使用に関する研究会』を発足して、課長英断で公共工事の仕様書に93年から盛り込まれた。JAS(日本農林規格)も認められた」と。

大阪府、大阪市、堺市などもそうだったが、部長か課長の英断が熱帯材使用削減につながっている。その人の熱帯材保全の意識と実行力によるところが大きいのだ。人を動かすとは、つきあいと繋がりだと痛感した。

9月15日午前から、中九州建設事務所へ連れていってもらい、資料を頂く。それから後藤さんへのインタビューだ。

「平成3年、つまり91年に県も間伐材合板も試作したとですよ。ダメとなって、自分が間伐材複合合板試作するようになったとです。」

しかし、壁があった。売れるかということです。建築士の仲間に働きかけて、買ってもらった。これで実用化となったとです。」

「県には公共事業でしようという理念を持って説得した。それで国産材複合合板が仕様書に入り、民間で使っていただいた。」

山の活性化のために、今度は国産材100%間伐材合板を作ろうと、平成4年に考えたとです。カットと皮を取るのに、県の助成金8500万円使って行えるようになった。

今の問題は、もう少しコストを下げたいことと、自治体が少し高い価格でも使っていくという姿勢と、市民への意識変革です。

国産材は余り高くないのです。北洋材、北米材、南洋材に金を落さず、過疎地の林業普及に力を入れたいとです。間伐材を使えば、山主の意識も変わる。一番意識変革を要するのは市民です。市民意識が変われば、自治体、企業の意識も変わる。それと専門化せず、山と合板、市民、自治体と手を繋ぐとですよ。」



## 投稿 第6期 枝打ち族に参加して

◇ 宮永 文

■今年も丹南町で「枝打ち族」のイベントが開催されました。参加者は17名で、職業・年齢等は様々ですが、中には林業家(?)もあり、興味ある話もいろいろと聞け、毎度のことながら楽しくいい思い出の場を持てたと思います。

作業は残念ながら「下草刈り」(今の時期がベストなのに)はできませんでしたが、「育成天然林」・「枝打ち」・「間伐」と、森の中に入り、いい汗を流しながら作業を行いました。そして夜の勉強会では、林業事務所の方から日本の森林や林業の実情などのお話を、大山振興会の方からは大山の歴史のお話を、PHD協会の研修生のビドゥルさんとミノさんにはそれぞれの母国ネパールとフィリピンの村のお話を、そしてウータンからはサラワクとアマゾンの熱帯林のお話と、本当に様々なお話を伺い、互いに意見を交わし合い、疲れているにもかかわらず、時間が許すならばもっと話をしたいと思ったほどでした。

今回も森に入って感じた事は日本の森は単一だという事です。日本の林業を支えている森は、スギ・ヒノキのみとってよい程の単一な森です。皆伐を行い、森全体をスギ・ヒノキでうめつくし、一斉伐採する。しかも手入れをされていない森の多さには驚きます。このような森が、保水力や酸素の供給、動物・昆虫の生活の場等を維持できるわけがないのです。

しかし、林業経営者の高齢化・後継者不在・不在地主化、林道の問題、そして木材の市場価格を考えると、広葉樹も育てて、...というわけにはいかないのです。今の林業方法を取らざるを得ないのです。それでも輸入材との価格競争で木材の自給率は低下する

一方、自由貿易の名の下に日本でも世界でも苦しんでいる人達が大勢いるのが現状です。このままでは日本の森が荒れ世界の森が消滅する日がそう遠くないのではと思ってしまいます。今、危機感を持った人がどれほどいるのでしょうか。それを知った人は一体何を始めればいいのでしょうか。まだまだわからない事だらけです。しかし、今わからなくても、枝打ち族や林業を営んでいる人々を通して何か見つかっていくだろう、そんな「枝打ち族」にしていきたいと思っています。今は闇の中にいる感じですが、必ず光はあります。その光を見つける手段として、危機感を持ち楽しみながら、枝打ち族に参加していきたいと思います。



## ◎不正取引の実態〔その2〕

## (1) 「不正取引」とは何か

いよいよ南洋材の不正取引の話に入る訳ですが、最初に「不正取引」の意味を決めておきましょう。よく新聞等で見かける「不公正取引」乃至は「不公正貿易」という言葉がありますが、それとは異なります。

「不公正取引」というのは1.ガット及びその関連規定、2.ウルグアイラウンドで合意された諸ルール、3.ガット関連以外の国際条約や二国間条約、4.条約ではないが国際法上の基本原則、等にそれぞれ反する取引のことであり、国内法に直接触れるケースも、そうでないケースもあります。国が定めた貿易のやり方自体が、これらの諸ルールに反する「不公正」な取引だと糾弾されるケースです。

これに反して「不正取引」というのは、上記のようなガットの取り決めや国際条約等に反する行為というのではなく、輸出国や輸入国の国内法規に違反する取引だと考えると理解しやすいでしょう（実際には、巧妙なカバーリングによって、どちらの国の法律にも引っ掛からないというケースもあります）。

つまり簡単に言うと、何等かの意味でSmuggling（密輸出入）になる行為と考えるのが、手っ取り早いでしょう。

本稿で触れるのは、後者の「不正取引（不正貿易）」の方です。

## (2) 不正取引の種類

近年、熱帯林保護運動の中で色々取り沙汰されている南洋材の不正取引とは、どんなものだったのでしょうか。フィリピンの場合では、大雑把に言って数量に関するものと金額に関するもの、そして若干ではありましたが、樹種に関するものに分けられています。

そのうち、樹種に関する不正というのは、フィリピンの大統領令で輸出が禁止されている貴重樹種（価格も高い）を、通常の樹種と偽って輸出するものです。

数量に関する不正とは、現地で発給された輸出ライセンス記載数量よりもはるかに多くの、信用状や他の書類上で書かれている数字よりも2割も3割も多い、場合によっては2倍もの数量を余分に船積みする手口です。

金額に関するものというのは、今でもパプアニューギニアで問題になっている、信用状記載価格と実際の決済価格が異なるというケースです。

その他に、あまり件数としては多くなかったようですが、税関を通さずに船積みして輸出するという、純然たる密輸出がありました。

## (3) 樹種に関する不正取引

フィリピンでは1976年以降、原生林からの伐採と丸太輸出が厳しく規制されるようになりました。なかでもファースト

クラスハードウッドと分類されるナーラ、ダオ、モラベ等12種類の貴重木（内1種は針葉樹）は、丸太とフリッチでの輸出が禁止されました。

しかし公共工事や他の森林開発で伐採されたものは、限定的に特別ライセンスをもらって輸出できることになっていました。だが、例によって、この特別ライセンスの入手には、多額のプレミアムがついたのです。

そこで樹種を偽り、一般材に混ぜて輸出するケースがありました。これは輸入者とは最初から打ち合わせ済みで、揚地で仕分けをし、特別な価格で引き取ってもらって、不正規な方法でバックペイを受けていました。

一般材に混入して船積みしても、乗船官吏や船員には見分けが付きません。もちろん検数員には判ったでしょうが、後で述べるように、タリーマンは輸出業者の言いなりでしたから、問題はなかったのです。

#### （4）数量に関する不正

これは、輸出業者（シッパー）が受給している輸出ライセンス記載の数量より、はるかに多量の丸太を意図的に船積みするケースです。このケースにも2つのタイプがあります。今、輸出売買契約では丸太6,000m<sup>3</sup>となっているのに、現地シッパーが3,000m<sup>3</sup>しかライセンスを持っていないというケースで考えてみます。

ひとつは、ライセンスに関係なく、そのシッパーが調達できる量、つまり6,000m<sup>3</sup>を積むことにしてL/Cを開設します。

木材は、海運実務上はバラ荷（バルキ

ーカーゴ）扱いになっていて、運送は荷主が積地港から揚地港（単数でも複数でもよい）までの間を借り切る形で、適当な大きさの船を備船します。これを航海備船と言います。

航海備船での運賃計算は、貨物の種類に応じた運賃率に、積み込んだ数量を掛けて算出します。積んだ量は、積地で測るのか揚地で測るのかというと、一般的には揚地で確認します。何故なら、海上輸送契約は運送の請負契約ですから、積むだけではなく契約した目的地まで安全に運んで幾らという運賃になる理屈だからです。

しかし備船契約で、積地において測った量で決めると書かれてあれば、そうなります。このスタイルを「積地ファイナル」と呼んでいます。そして南洋財の運賃は、その時の海運相場で港から港までで幾らという決め方になります。例えば、ミンダナオ島のブツアン積みで大阪と名古屋の2港揚げで幾ら、という計算です。

普通は、積んだ量に立方メートルあたり18ドルとか20ドルとかをかけて計算するのですが、南洋材船の場合は、満船になるまで積もうと八分目しか積まなくても関係なく、規定の積地から最終揚地まで幾らという、大雑把な決め方でした。ですから、6,000m<sup>3</sup>積みの船に、3,000m<sup>3</sup>積もうと、6,000m<sup>3</sup>積もうと、備船契約上は関係なかったのです。

ただ、貿易決済がL/C方式ですから、銀行で手形を買い取ってもらうためにはB/Lが必要です。だから船主（代理店）はメートレシートをもとにB/Lを作成します。そのためには検量証明書が必要な

のですが、フィリピンに限らず、途上国のローカルポートへ行きますと、日本のように法律による免許を受けたステベドア（沿岸、船内荷役業者）や検量会社がいる訳ではなくて、有力なシッパーが自分で荷役を全部行い、タリーマンも抱えています（ただ、インドネシアのように、タリーマン個人が公式検量員の有資格者で、そのサインがなければ税関が受けつけないという制度もあります）。だから、検量証明書の捏造くらいは朝飯前だったのです。

問題なのは税関です。荷役が始まると、乗船官吏と称する税関職員が乗り込んできて、荷役を監視することになっています。そして荷役終了後、本数を確認して輸出申告書に記載し、サインします。前号で説明したように、この乗船官吏のサイン入り許可証がないと、銀行で荷為替手形を買い取ってもらえませんし、また出港時に必要なクレアランス（出港免状）がもらえません。出港免状がないと、外国の揚地港へ入港した際、入港検査が受けられません。そしてこの免状には、本数の記載も必要なのです。

この当時、日本と東南アジアとの間を走っていた南洋材積載船は、容量にして大体5,000㎡から6,400㎡くらいを積めるクラスの船でした（甲板積みを含む）。ですから3,000㎡の輸出ライセンス（これは税関吏が持っている）で積んでいけば、かなり余裕ができる筈です。しかし実際は6,000㎡も積んでいるのですから、満船状態となってしまう、税関吏だって「これはおかしい」と感づくはずです。

そこで、税官吏の抱き込みが行われる

のです。というより、ローカルポートでは、その税関とシッパーは顔なじみで、こういう馴れ合いは日常茶飯事でした。私が見た例では、積荷役は満船にするには3日も4日もかかるのに、乗船官吏は最初と最後しかいなかったり、乗っていても、本船から提供される部屋でランプをしたり、寝そべってばかりでした。

そして荷役が終わると、ステベが提出した検量表通りの数字を申告書に記入して、確認の意味など全くないサインをしてくれるのです。

このようにして、シッパーが持っているライセンスの量とは関係なく、船積みが行われ、L/C をカバーするB/L が発行され、実際に積んでいる量での出港免状も発給されて、無事に出港するのです。あとには、3,000㎡というライセンスの枠内の積込み記録だけが税関に残り、やがてはその数字を基に、フィリピン通関統計が作成されるのです。

一方、日本の税関には、船長から事実通りのクレアランスと積荷目録が提出され、揚荷終了後、免許を受けた検教会社が本数を確認したポートノートが提出されて、インヴォイスを添えて通関業者から輸入申告が行われます。

ですから日本の揚地においては何等の不正もなく、輸入通関が行われていた訳です。ただその数量をフィリピン側の輸出統計と比較すると、輸出量の2倍も輸入していることになります。政変後のフィリピン国会で、「日本の税関は密輸の片棒を担っている」と問題にされましたが、片棒を担いだのはフィリピンの税関の方だったのです。

その他に、ヴィサヤ地区やパラワン島など税関の目の届かぬ場所で、密かに木材を積んで出港するという、まるっきりの密輸や、香港経由のL/C操作で不正輸出する手口もありましたが、紙数の関係で省略します。また、機会があれば明らかにしたいと思います。

#### (5) 価格に関する不正

木材は典型的な市況商品でしたから、いくらで売買するかは当事者の自由意思なのですが、この連載で指摘した通り、資本が脆弱だった現地木材業者は、名目はともかく実質的には、特定の日本の輸入商社のダミーのような存在でした。ですから、価格は日本側の言う通りになっていました。

木材資源が枯渇しはじめ、資源ナショナリズムが高まり始めた1980年前後からは、インドネシアやマレーシアのように輸出のチェック・プライス制度(※注)ができましたが、それまでは売り手と買い手の力関係で値段が決められていました。ですから安く買い叩いた日本商社は「国際的木喰い虫」と言われたりしました。

だが、ほかにも木を喰った虫がいたのです。それが価格に関する不正です。まずフィリピンのシッパーは日本の商社から直接自分宛にL/Cを開設させるのではなく、香港にある自分のダミー宛に開設させます。その時の単価は、通常一般相場の通りです。

香港のダミーは、フィリピンの業者宛に何等かの決済手段で同量の注文を出します。この時の価格が、最初のL/Cの価格、つまり正当な価格より3割も5割も安い価格となっているのです。そして船積みが終わると貨物は直接日本へ行き、L/C決済に必要な書類は香港へ送られます。香港のダミーはフィリピン本社が作ってくれた書類を使い、三国間の仲介貿易という形式で、日本の開設銀行が発行したL/Cと送られてきた書類を香港の確認銀行へ持ち込みます。あとは、前号で説明したような手順で、日本-香港間で決済が行われます。

この方法をとると、フィリピンのシッパーは、取引額の何割かを自国内の不安定なペソで受け取る以外に、残りの何割かの代金を香港でドルで受け取ることができ、在外資産として貯蓄してゆくことができます。

このようなやり方は政情の不安定な途上国の有力者がよく使う手段ですが、これをうまく利用すると、日本の輸入商社の海外資産もできます。もちろん、税法上の脱税にはなりません。

このようなことが頻繁に行われて、貧乏な途上国としては、貴重な天然資源を切り売りしておきながら、それに見合う外貨が充分回収できず、国内での再投資が進まないという、国家的損失を受けることになった訳です。

#### ※注 チェック・プライス

ガイドラインとも言い、木材の安売りを防ぐための最低輸出価格制。従って、日本-EC間の半導体のダンピング防止の為のフロア・プライス制とは意味が逆である。

# 『くまの熊野から』……』

を読まれるまえにあたって。

◆ 永田 健一

●今号より、読者の方の声もあって以前ウータンに書いていただいた中村義明さんに季節ごとの山の暮らしや山仕事のことを4回に渡って書いてもらうことになりました。

そこで取材もかねて、この夏遠出しなかったこともあり突然中村さんの住む熊野へ向かったのです。8月の末のお話です。熊野川町は奈良県と三重県境にあるところで995世帯、2235人（7月末現在）の町です。

大阪から車で五條→十津川→本宮をめけていくのですが、軽く5～6時間ほやがる日本の4ベツト（中村さんいわく）のようなところですよ。近くには有名な川湯温泉があり休日には関西方向より多くの人が集るところ。

当日、あいにくの雨で山仕事は休みだった中村さんは田んぼに出てられて日も暮れかけようとする頃、帰ってこられた。

中村さんと連絡がとれず「どうにかなるやろう」と突然うざがったので少々びっくりされた様子だったけど心よくあがえてもらった。

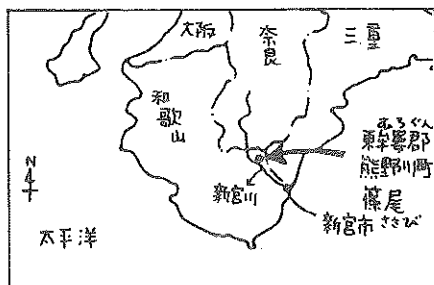
ここに集まるのももう4～5年ぶりであるが何も変わっていないのも田舎ならではというところでしょうか？

夜おそくまで酒をのみ話をして翌日は山につれていってもらうことにしました。

次の日も天気は悪く山仕事は中止だったが2人で山へ向かう。

車で15～20分ぐらい篠尾の山を上る。

この時期山仕事は下草刈りから伐採の仕事へ変わる。



現場もこれから切り出す場所だった。今の中村さんの仕事は草刈り機を使っての伐採地の足場をよくすることでした。そのあと土場（集積場所）づくり→搬出となる。

今年いっぱいほやがる見込みらしい。このあたりの木は70～80年生らしいがかなり細い木もあり、又林道の上と下でもだいぶちがう。

伐採木は新宮まで運ぶということですよ。吉野などに代表されるようなブランドをもたない山はこの日本中の山にみられるようになってなかなか高く売れず「やはりとにかく切って出すことが第一であってその品質や手入れなど、高齢化にもともないどうにもならないのが現状でした。

改めて考えさせられた一日でした。又、中村さんの「熊野から…」を応援して下さい。



▲ 下草刈りをする中村さん



◎ 8年目の山暮らし

中村 義明

早いものでウータンに「日本の森から— 熊野から」を載せて頂いてから6年になる。山暮らしも8年目を迎え、山仕事も7年目になった。

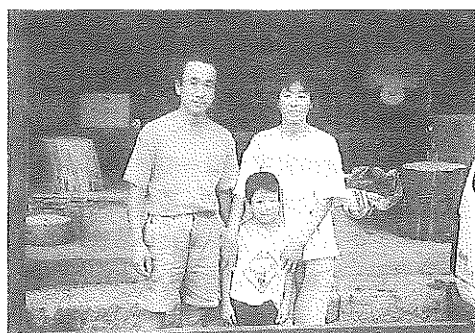
今年は秋の訪れが早い。彼岸を待たずして、涼しいさわやかな風が吹きだした。例年なら10月になる我家の稲刈りも、9月の中旬に早々と済んでしまった。

今年は新しい品種で作ってみた。分けつが少なく収量は目標より少なかったが、虫も病気もほとんど無くきれいなお米を頂くことができた。脱穀したその日に、籾摺り精米してもらい、新米を炊いて仏様にお供えし、夕飯に頂いた。7年前、生まれて初めて稲を作り出来たお米を口にした時のような深い感動はないが、それでも毎年新米を頂く時は、お腹だけでなく心も温かい思いで満たされる。

我家の米作りも今年で8年目になるが、ここ2、3年前からだいぶん土も良くなり、草取りも楽になって、収量もまあまあ頂けるようになってきた。でも、我家の目標はこの山の田圃から反あたり8俵を無農薬有機栽培で頂くことだから、まだまだこれからだ。

毎年、田植えや稲刈り、脱穀（こちらでは稲はちと言う）の時に、近所のおじさん、おばさんたちが手伝って下さるのが本当に有難い。おじさん、おばさんたちも60代から70代、いつまで米作りができるか分からない。体がしんどくなってきて、高い機械を買うことにもなる。

「それだけのお金で、一生食べるだけの米が買えるで」と言われても、やっぱり米作りがしたいのだ。自分で作った米を



頂く気持ちは、やってみなければ味わえない。体が動く限りは米を作りたいというおじさん、おばさんたちの気持ちが、私にも分かるような気がする。村で一番若い世帯（と言っても40代後半なのだが）である私たちも、できる限りおじさん、おばさんたちのお手伝いをさせて頂こう。山の中の村では、助け合いなくしては暮しが成り立たないのだ。

\*

村で唯一の子どもである我家の一人息子、明（あかる）は今年6歳になり、小学校1年生になった。入学の時は、村で10年ぶりに子どもが小学校に上がるというので、村中からお祝いを頂き恐縮するやら嬉しいやら。子どもがいるだけで村が明るくなる。賑やかになる。子どもの存在は大きい。明を育ててきたのは私たち親だけではない。村のおばさん、おじさんたちも、明の面倒を見てくれ、かわいがって下さる。特に2人のおばさんには、実のおばあちゃんのようにお世話になっている。本当にありがたい。

子どもとお年寄りが一緒に暮らせるというのは大事なことだと思う。仕事中心、経済効率優先の現代社会では、異なる世代の人と人とが関わり合うことでもたらされる豊かな心がどこかへ消えていっているのではないだろうか。

今年は動く年だ。山で働く仲間たちも動いた。

去年の春から森林組合に入り、一緒に働いてきた24歳の若者（山では20代は金の卵、30代は銀の卵、私のような40代は銅の卵なのだ）、金の卵が、この9月に辞めて愛知県の実家へ帰っていった。20代と30代と40代の3人が、造林班から伐出班へと変わった。造林班にいる20代の1人が夏から炭焼きを始めた。

そして私はこの夏、森林組合を辞め、地元の山で山ぶと（山番）となった。山ぶとというのは、山主から任されて山の管理をする人のことである。森林組合での仕事は勉強になったし一緒に働いてきた人たちと別れるのは寂しいが、家庭の事情やら何やらで、今年の初めから誘われていた山ぶとになる話を引き受けることになったのだ。

家庭の事情とは、私も家事を分担しなければならなくなり、時間の余裕がなかなか無くなってきたことだ。3年前から「助産婦になりたい」と言っていた妻が、40の手習いで看護学校へ通い出した。車で片道1時間の新宮市まで通学するので、どうしても私と家事を分担しなければやっていけない。私が自分の夢を追求するのと同じように彼女がそうするのはもっともだし、私も家事を分担するのは当然のことだ。とは言っても、時間に追われ



るとつい不満も出てくる。時間のゆとりが欲しいという気持ちが強くなってきた頃、山ぶとの話が来た訳だ。

山ぶとに誘って下さるのは村の人に信頼されているということでもあり、それがまた有難いことだと思える。私たちがこの村に移り住んだ最初の頃は、村の人たちも私たちがいつまでもこかへ出ていくかもわからないと思っていたかもしれない。私たちも少しずつ、この村に根を下ろしてきたのだろうか。

山ぶとになってから、山仕事へ通う時間も短縮された。今までは隣の本宮町の山で働いていたが、今では地元の熊野川町で我家の見える篠尾の山で働いている。我家が見える山で働くのは、何とも嬉しい気分だ。

篠尾の山で働くようになって、鷹を見た。熊野の山でも、鷹は少ない。ムササビも初めて見た。目の前で何度も飛んでみせてくれた。その時一緒に働いていた和田さん（私と同じ40代で、都会から帰って山仕事14年になる）も、14年間でムササビを見るのは2度目だということだ。ブロッケンも見た。ブロッケンというのは、山の尾根にいる時、谷に霧がかかり、反対側から太陽の光が射ってきて円い虹がかかり、その円い虹の中に自分の影が映る現象で、非常に珍しい。私も20数年前、南アルプスの北岳で見て以来だ。そんなこんなで、地元の山で働くようになったことを山が祝福してくれているようで、とても有難いと思う。

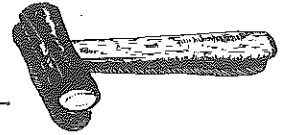
{つづく}



▲ 中村さん一家の住む校舎の中



# つくり手からの『家具』のお話



● 永田 健一 [別注家具製作ZOO]

もう少し、  
その2 家具材のことを

前号の終わりに家具材はどんどん上っていると言いました。

改めてここで書くこともないのですが、雑木材がなくなっているからです。

戦後の拡大造林のあとにも補助金をあてにした杉、松の植林により国内の雑木材は激減しました。

私は国産材のタモ、セン、カツラ、ブナを主に使っていますが、その産地はほとんどが北海道だと聞きますし、じつじつ奥地へと伐採が進んでいるようです。

私の使う材がどんな状態で切られているのか見当もつかないので、「長持ちするものをつくれればいい」というだけでは割り切れぬ思いをいっぱいぞ。

2年ほど前に春の白神山地に行く機会があり、ブナの森に入りました。

新しい若葉と残雪が見れとても感動しました。

ブナの材はとてもあばれるので加工しにくい材ですが、きめが細かく肌ざわりがよく強い木です。あばれるとはそりやねじれがあることで、きびしい自然の中、雪の重さや風にたえて育っていくブナであるからと実感しました。

そんなブナの株も保護区外では、無残なハゲ山になっていました。

切られたブナもあまり高くはなく、まくら木などにされるものもあります。

とてもやり切れぬ思いになります。

又、引き出しの側板に使われる桂もあばれやすいので敬遠されがちで、すなおな熱帯材にとって変られているようです。

熱帯材は狂いが少なく、色の均一で、加工しやすく安いとすれば使われるのは理解できます。

しかしもうそこに商品があるからただ使っただけのものを作るという発想はやめないとダメでしょう。何かが振れあっています。

無垢材は色々です。あばれていたり節があったり色々あります。

それらを要所要所へ使っていくことで生きてくると思います。

ナラ	硬い、高級品、家具全般に
タモ	中硬、あばれ少ない、
ブナ	重い、あばれ大きい、イス類、 <sup>スモ、ヤ</sup>
トナ	大径木がある、テーブル天板
ホウ	やわらかい、まな板
シナ	、 白い色、版画用板
カツラ	、 あばれる、引き出し側板
セン	軽い、中硬、家具全般

私の少ない経験の中から書いてみました。わがりますでしょうか？

もう一つ大事なことは材が乾燥していることです。私たちが買う材は乾燥材ですが中には厚みのあるもの(50mm以上のもの)は削ってみるとベタベタのものもあり細み上げたあと、ホゾがハズれたり、そってしまったりどうにもならない場合もあります。

(つづく)

\*次回は家具の植栽についてです。

『ウータン・森の通信』アンケートから (抜粋)

\* 日本における森林開発団の森林破壊ぶりの告発や、日本の運動に対する問題点指摘、日本人の、木に対する考え方の変遷などについて (読みたい) 日本の南北問題のように思われます。 大阪府 小林圭二

\* 機関紙キチッと発行しようと思っっているようですが、ムリをしたり自分の力以上の事をしようとする、今の経済論理に取りこまれてしまいます。遅くとも続けて下さい。現実に自分たちの主張が反映されなくとも主張し続けることが民主主義、私達の生き方なのだと考えます。

愛知県 関本文靖

\* どんどん熱帯林が破壊され、地球が汚染されていくことが私たちの毎日の生活に痛みとして伝わって来ないから、大きな力となつて変えていけないもどかしさを感じます。インターネットでRANなどの大きなNGOとつながり、FaxやEメールでの反対行動などダイナミックな運動も絶対必要。市民運動もグローバルに!!

大阪府 鶴川まき

\* 熱帯林講座は伝えたいことが一杯あるせいか、盛り沢山で、参加者の不消化が心配。

兵庫県 麦島きみ子

\* 各都道府県の組織充実及び統一行動連絡体制確立を。行政に熱帯材削減の成果を報告させる必要があると思います。

奈良県 由良行基周

\* ウータンの活動は森をまもることになっているのでしょうか。私の現在の仕事が環境の技術を論じる職場なので、時々論議のずれに絶望的になっていたりしています。

京都府 志儀真由美

--- 異論、激論、大歓迎! 投稿お待ちしております。

\* ① 林業で「村おこし」等のとりくみとネットすること。

② 都会での「街づくり」運動を他分野の人々と共同で創りだし、そこで輸入材を使わない運動を創り出すこと。

大阪府 阪野修

\* 針葉樹合板への転換のうねりが今年はありそうですが、2/3はシベリアのカラ松だそうでホンマにどないしましょ。

東京都 小倉正

\* かつてラバウルは軍事侵略の拠点でした。今ニューギニアは資本による侵略の地です。日本は国際犯罪をやめるべきです。でない未来はないでしょう。

茅野自然と文化を守る会 原 伊市

\* ウータン・オリジナルノートなど作ってはいかが? 表紙がソフトな色でかわいいイラストのB5サイズのノートで非木材紙だと最高!

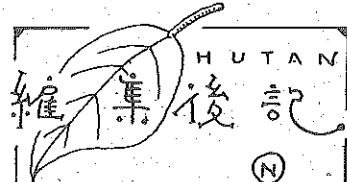
国産間伐材のカラーBOXキットなども。ドライバー一本で自分で組み立て、オイルを塗るセット。(新聞に、杉を熱して圧縮すると広葉樹並みに出来るとのってました)

兵庫県 上田真弓

・皆さんありがとうございました。これからもどうぞよろしく!

◇ ウータン活動報告 ◇

- 8月9日～ 荒木、エルサル・パドルへ
- 8月11日 ウータン40号発送
- 8月20日 関西熱帯木材使用削減委員会(以下削減委)全体会議
- 8月22日 「枝打族」最終打合せ
- 8月26日 ウータン豊中等で、豊中市と話し合い
- 8月24日 地球環境ネットワーク関西・第2回学習会
- 8月30日～ 第6回「枝打族」丹波・大山大
- 9月1日 主催・PHD協会ほか、協力・ウータンほか
- 9月4日 削減委・自治体部会
- 9月6日 西岡、農林省、WWFセミナーへ
- 9月12日 削減委、記者会見。削減委質問に56自治体削減と。
- 9月13日 削減委、サラワケキャンペーン委員会と協力して「全国の熱帯木材使用削減等に関するアンケート」発送。
- 9月12日 日合連理事は「針葉樹等合板がシェアの36%予測」と。
- 9月14-16日 西岡、熊本・中九州建設他へ



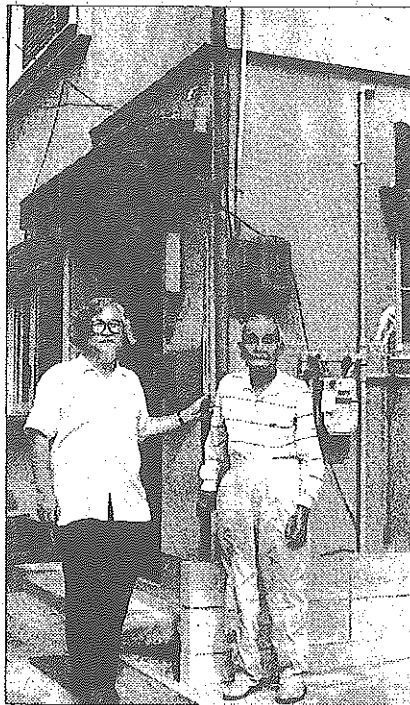
今回は後記にかえて、本の紹介を、朝日にこんな記事でのった。全壊した私の家家のすぐ近くだということと本を扱っていることでおもしろ味をみいだ。注文して全だに手にとりてな本だが読んでみたい一冊です。

[朝日]

INFORMATION

# 住む人の命守った職人魂

無傷だった家の前に立つ天王寺谷巳之助さん(右)と中村幸安教授(神戸市東灘区深江本町丁丁目)



建てた百七十軒のうち、阪神大震災で倒壊したのはわずか一軒。神戸市東灘区深江本町丁目の元大工、天王寺谷巳之助さん(86)が請け負った木造住宅が抜群の耐震性を誇っていることを、「住まいの100番」事務局長の中村幸安・明治大教授が著書「人を殺さない住宅」(小学館)で紹介した。「地盤をよく調べる」「通し柱を多く入れる」といった基本を守り、施主が「怒を作って」と頼んでも、「家が持たない」と度々拒んだ。一般な職人魂が住まいと人を救った。

震災で倒れたのは170軒のうち1軒  
東灘の元大工 天王寺谷巳之助さん(86)

## 安全基本に一徹

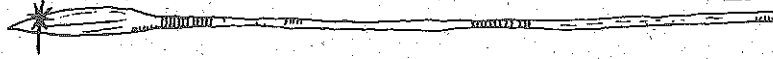
明治大教授が著書で紹介

天王寺谷さんは一九三一年から、四十年前に引退するまで主に木造住宅を請け負ってきた。去年一月十七日の大震災で、自宅前を走る阪神高速道路神戸線は横倒しとなった。だが、三十七年前に自分で建てた木造二階の自宅は真つすぐ立っていた。中村教授はテレビに映った高速道路の倒壊現場の周りで、無事な建物があるのを見れば、親方から「地面をよこし調査したところ、被害よく見て基礎を決めるのが肝心だ」と教えられた。柱が多く、窓が比較的小さいのが、手がけた家の特長だ。①一、二階を貫く「通し柱」を六本以上入れる②筋交いは建物の命だから、まんべんなく入れる③構造材の接合部に金物を使う④床下の湿気は避ける――などが基本という。基本にこだわらるので、施主とけんかにもなった。中村教授は「震災の大きな被害には、基本通りに建てられていなかった面もある。天王寺谷さんは、安全な住宅づくりを最優先にした。地域はぐくんだ大工の技術がすたれつつあることが残念だ」といふ。

ポランテアで被災建物を約八百戸調べた一級建築士の石井修二さんは「木造建築では、壁や筋交いが少ない、土台が規定の逆T字形になっていない、土台と建物本体が金具でしっかりと結び付けられていないなどの例で、被害が大きかった。建築主の要求でも、安全に問題があれば拒否した天王寺谷さんの姿勢は正しい」と話している。

●「人を殺さない住宅」は定価千三百円。

# HUTAN ACTION SCHEDULE



## 1996 熱帯林連続講座 in とよなが

現地にはじく尻腰を落ち着け、先住民の「暮らし」や「開発」をみつめてきたお二人に、それぞれの視点で語っていただきます。  
そして最後に、「森喰い虫」日本のわたしたちがてきることを考え、アクションへのつながりをざくりたいと思います。

I. 11月10日(日) 午後2時～5時

### 「先住民のゆくえ……焼き畑と熱帯林」

◆講師 井上 真氏 [東京大学助教授 農学生命科学研究科林政学研究室]

著書「熱帯雨林の生活ボルネオの焼畑民とともに」築地書館  
「焼畑と熱帯林」弘文堂

1987年～89年インドネシアの東カリマンタンにて「熱帯降雨林研究プロジェクト」に参加。  
85年同地を再訪、カリマンタンの伝統的焼畑システムの変容を研究。



II. 11月24日(日) 午後2時～5時

### 「ヤシは地球にやさしいか……熱帯林破壊とプランテーション」

◆講師 峠 隆一氏 [環境ライター]

著書「9つの森の教え」築地書館  
マレーシアのサラワク先住民に魅せられて、のべ一年間生活を共にし、現地を調査。  
サラワクへのスタディツアーも主催してきた。

III. 12月8日(日) 午後2時～5時

### 「暮らしの中の熱帯林」

◆奥村知亜子氏ほかウータンのスタッフ

ゲームなどをまじえて、身のまわりにある熱帯林由来の品々に目をむけてもらい、家具や住宅と熱帯林破壊、国産材のことなど私たちが問題解決のためにできることを探る。

【場所】とよなが国際交流センター

〒560 豊中市北椋3-1-28

TEL.06-843-4343

【参加費】800円

【主催】ウータンとよなが

【協力】ウータン森と生活を考える会

【問い合わせ】TEL.06-841-8221 井下祥子 [夜間のみ]



### ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】大阪市北区中崎町1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel. 06-372-1561

【一部】300円 【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。